

河川 72巻 第10号 (通巻 第843号)
2016年10月20日発行 (毎月1回20日発行)
ISSN 0287-9859

河川

2016
October
No.843

10



斐伊川本川から斐伊川放水路と網状砂州を望む 島根県出雲市

特集●大河川の歴史 (第2回) ~北上川・斐伊川~

特集・大河川の歴史(第2回)～北上川・斐伊川～

河川
10
月
号
目
次

特 集

<北上川>

北上川の治水と河川文化	公益財団法人岩手県国際交流協会理事長	平山健一	3
北上川五大ダムと北上特定地域総合開発計画	東北地方整備局北上川ダム統合管理事務所長	佐藤伸吾	11
一関遊水地の歴史的経緯・特性	岩手大学理工学部システム創成工学科社会基盤・環境コース准教授	小笠原敏記	16
砂鉄川河川災害復旧等関連緊急事業完了から10年の節目	旧川崎村村長	千葉 荘	19
東日本大震災と北上川下流河川事務所の対応	いであ株式会社東北支店技師長	島田昭一	24
流域を育んだ母なる北上川と仙台藩の北上川舟運	石巻千石船の会	邊見清二	31
かわまち石巻と北上川	石巻市長	亀山 紘	37
北上川の河川空間の利用～川とのふれあい～	NPO法人北上川サポート協会理事長	吉田達男	40

<斐伊川>

斐伊川 - 古代出雲の歴史を映す -	NPO法人出雲学研究所理事長	藤岡大拙	45
斐伊川水系における治水計画・治水事業の変遷	中国地方整備局河川部河川計画課長	鈴置真央	50
斐伊川下流域の自然環境変遷史 - 出雲平野と宍道湖の生い立ち	島根大学名誉教授	高安克己	55
たたら吹製鉄と斐伊川流域の砂鉄	島根県立古代出雲歴史博物館交流・普及課長	角田徳幸	62
大正末期から昭和初期に行われた大橋川改修による宍道湖の環境変化	NPO法人自然と人間環境研究機構理事長	石飛 裕	68
悠久のロマン 歴史の創造～斐伊川神戸川治水事業にかかわって～	島根県議会議員	佐々木雄三	71
斐伊川水系の治水の現状とこれから	中国地方整備局出雲河川事務所長	柴田 亮	78
砂河川斐伊川が抱える治水問題と今後の対応 - 総合的な土砂管理の必要性	中央大学研究開発機構教授	福岡捷二	82
松江開府400年の歩みと斐伊川	松江市長	松浦正敬	88

川とわがまち

水が育む、コウノトリが舞う里 越前市			92
—奈良俊幸 福井県越前市長に聞く—			
聞き手：中村圭吾 = 近畿地方整備局福井河川国道事務所			

水辺とつながる暮らしを楽しむ

くま川水浴場～被災地の子供達に心の夏休み～	九州地方整備局八代河川国道事務所長	貫名功二	100
-----------------------	-------------------	------	-----

海外レポート

ブラジル連邦共和国「統合自然災害リスク管理国家戦略強化プロジェクト」の進捗状況について	JICA専門家(チーフアドバイザー/防災政策)	山越隆雄	104
---	-------------------------	------	-----

ニュースと話題

第9回「いい川・いい川づくりワークショップin備中高梁」を終えて ～みんなで考える“いい川”“いい川づくり”公開選考会～	いい川・いい川づくり実行委員会事務局		109
平成28年防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞	水管理・国土保全局河川環境課水防企画室		112
	防災課災害対策室		
	砂防部砂防計画課		
第39回日韓河川及び水資源開発技術協力会議の開催報告	水管理・国土保全局水資源部水資源計画課課長補佐	佐渡周子	115
2016年ストックホルム青少年水大賞参加報告	日本水大賞委員会事務局：公益社団法人日本河川協会		118
水管理・国土保全局の動き	水管理・国土保全局総務課		121
日本河川協会の動き	公益社団法人日本河川協会		122

水が育む、コウノトリが舞う里 越前市

Echizen city, Homeland for Oriental White Stork fostered by water



な ら と し ゆ き
奈良俊幸

福井県越前市長に聞く

Interview to Toshiyuki Nara,
Mayor of Echizen City, Fukui Prefecture

聞き手：中村圭吾なかもらけいご = 国土交通省近畿地方整備局
福井河川国道事務所

Interviewer : Keigo Nakamura, Director of Fukui office of
River and National Highway, Kinki Regional
Development Bureau, MLIT

【紹介市長との関係】

聞き手：本日は「川とわがまち 市町村長リレーインタビュー」で、福井県越前市の奈良市長を訪問しています。

それでは、早速ですがご紹介者の大阪府松原市長の澤井宏文様とは、どのようなご縁があったのでしょうか。

市長：越前市では、平成20年度に本市の農業の目指す姿を示す「食と農の創造ビジョン」を策定するとともに、平成21年4月1日には「食と農の創造条例」を施行しました。

また、平成22年度に「コウノトリが舞う里づくり構想」を策定し、JA越前たけふと協力して、環境にやさしい農業の振興に努めた結果、農薬や化学肥料の使用を抑えた特別栽培米の本市の作付面積は、福井県全体の約4割を占めています。



インタビュー風景



市内を飛ぶコウノトリ

越前市の清らかな水で栽培した米の多くは、松原市内の老舗米穀メーカーに出荷しており、寿司店など全国の外食産業はもとより、おいしい日本のブランド米として海外にも、松原市から販売されています。

昨年、松原市内の老舗米穀メーカーを視察させていただいた機会に松原市役所を表敬訪問し、澤井宏史市長と親しく懇談をさせていただきました。

また、私が事務局長を務め、全国の394市区町村がサッカーを通じた地域活性化や自治体間交流を目的に結成した「日本サッカーを応援する自治体連盟」にも、松原市に加盟していただいています。

【越前市の紹介】

聞き手：それでは、越前市の紹介をお願いします。

市長：(1) 越前市の地勢や歴史

越前市は、福井県のほぼ中央に位置し、面積は230.75 km²で県面積の約5.5%を、人口は81,613人（平成27年国勢調査速報値）で県人口の約10.4%を占めています。



位置図

また、市域の東部に越前中央山地、西部に丹生山地、さらに南部に「越前富士」の日野山がそびえるなど、400～700m級の山々に囲まれています。

それら緑深い山々からは、県内三大河川の一つである日野川をはじめ吉野瀬川、鞍谷川などが流れ出し、市域の中央部に広がる武生盆地にうるおいを与えながら、やがて九頭竜川へ合流して日本海に注いでいます。

この越前市の誕生は、武生市と今立町の合併による平成17年10月1日と新しいものの、その歴史は大変古く、大化の改新の頃に越前の国の国府が置かれて以来、北陸の政治・経済・文化の中心として栄えてきました。

平安時代には、「源氏物語」の作者である紫式部が生涯でただ一度、京の都を離れ、多感な少女時代を過ごした地でもあります。

産業面では、越前和紙や越前打刃物、越前箆笥などの伝統産業から、電子部品などの先端技術産業に至るまで幅広い産業が集積し、製造品出荷額が福井県内第一位の「ものづくり都市」として発展を続けています。

また、豊かな緑や清らかな水など美しい自然環境を誇る本市は、コウノトリをシンボルに「生きものと共生する越前市」を目指して、里地里山の保全再生や環境調和



越前箆笥



越前打刃物

型農業の推進を図っています。

市内では、国の重要無形民俗文化財の「越前万歳」や継体天皇の即位を祝う「蓬莱祀（おらいし）」をはじめ、「式部とふじまつり」「神と紙のまつり」「あじまの万葉まつり」など、歴史や文化を象徴する行事も数多く開催されています。

さらに近年は、「越前市三大グルメ」として「越前おろしそば」「ボルガライス」「武生駅前中華そば」が好評を博していますので、ご堪能いただければ幸いです。

(2) 半世紀に一度のまちづくり

越前市では現在、まちづくりの大きな節目を迎えています。

平成30年に「福井しあわせ元気国体・福井しあわせ元気大会」が開催され、本市ではフェンシング・軟式野球・ソフトテニス・ソフトボールの4つの競技が実施されます。

8月に開かれたリオデジャネイロオリンピックには、越前市出身の見延和靖選手と佐藤希望（のぞみ）選手がフェンシング・エペ種目に出場を果たし、6位入賞と8位入賞に輝きました。

福井国体でフェンシングの会場となる武生中央公園体育館は、来年8月の完成を目指して改築工事が進められています。

武生中央公園も、越前市出身で日本を代表する絵本作家・かこさとし氏の監修を受け、「次世代の人が育つ空



新体育館パース

間「絵本の世界を映し出す空間」「地域活性化の核となる空間」をコンセプトに市民の広場などの整備を行っており、かこさとし氏の作品のモチーフを大型複合遊具や植栽、せせらぎ等に演出し、子育てに関わる豊かな文化を親子が共に体験し学ぶ場として、来年8月の完成を目指しています。

また、老朽化した市役所本庁舎と今立総合支所も改築に向け、8月に基本設計を策定したところです。



シンボルロード南側から庁舎ビルを見た外観イメージ

新庁舎（本庁舎）パース

本庁舎は、シンボル性やアクセス性に配慮し、「四方正面」の考え方を取り入れるとともに、あらゆる災害に対応する防災拠点機能と、市民利用のホールや広場等を併設することにより、市民が利用しやすく、多くの人で賑わう「オールインワン型庁舎」として設計し、今立総合支所は、景観に配慮し、既存施設との連携も図りながら、市東部地域の防災拠点としてはもとより、複合的な施設として設計しました。

引き続き12月に今立総合支所の、来年3月には本庁舎の実施設計を策定し、いずれも来年に着工する予定です。

さらに、平成35年春には、北陸新幹線の金沢・敦賀間が開業予定で、本市に設置される南越駅（仮称）も開業します。

昨年12月に策定した南越駅周辺整備基本計画の駅周辺整備コンセプトである「伝統・文化を未来につなぐ癒しと交流の空間」の実現に向け、9月末に概略設計を作成します。

このように、ここ数年間で越前市は大きく変化を遂げることになるため、一連の「半世紀に一度のまちづくり」を千載一遇の好機と捉え、「元気な自立都市 越前」の創造を目指しています。

(3) 環境・文化 創造都市宣言

越前市は昨年10月に市制施行10周年を迎え、「市の鳥」であるコウノトリの放鳥も行われました。

越前市の豊かな自然環境や越前国府の歴史と文化、1500年の歴史を誇る伝統工芸やものづくりの技術を強く市内外にアピールし、今後のまちづくりの方向を明らかにするため、昨年の9月市議会において、「環境・文化

創造都市宣言」を行いました。

宣言文は、前文と本文3項目で構成され、前文では、本市が美しい自然環境と1500年にわたる歴史や文化、伝統のものづくりと先端産業が共存する調和のとれたまちとして発展を続けたことから、今後も市民が誇りを持って暮らせるまちを築いていくことを内外に示すため、環境・文化 創造都市を宣言することを謳っています。また、本文の1番目では、出生率の向上や定住化促進の期待も込めて「幸せ運ぶコウノトリが舞い」とし、「人にも生き物にも優しい」というフレーズの中に、環境に優しい農業、安全でおいしい食の意味を含め、自然環境の保全・再生などに積極的に取り組むことを「うるおいのあるまちを創ります」という言葉で表現しています。

本文の2番目では、越前国府の歴史を代表する人物として「紫式部」を挙げ、市民がこのまちを誇りにしていることを「越前国府の文化を尊び」と表し、さらに歴史や文化に基づいた新たな活動を創造していく決意を「新しい風を起こします」という言葉で表現しています。

本文の3番目では、越前市のものづくりを内外にアピールするため、「和紙・打刀物・筆筒」を具体的に挙げ、先端産業と合わせて、本市にはものづくりの技術が育ち、新たな価値を創造する風土があることを「ものづくり越前」との言葉に込め、世界に発信するものです。この宣言により、先人が築いてきた本市のすばらしい環境と文化をさらに磨き上げ、新たな魅力を創造し、市民が誇りを持てるまちを市民と共に築いていく決意を表明しました。

【川にまつわる思い出】

聞き手：越前市も市長さんの少年時代から現在と、大きく変化したと思われませんが、特に河川にまつわる思い出をお聞かせ下さい。

市長：母校の吉野小学校の校歌は、「吉野瀬川は流れてたえず」から始まります。

小さい頃は、木の枝で作った船を川に浮かべて競争させる遊びを、近所の友だちとよくしたことを覚えています。



吉野瀬川の桜

現在は、吉野瀬川に合流する武生承水路が自宅の前を流れており、春から秋にかけては毎月2回ほど堤防の草刈りを行い、河川の環境美化に汗を流しています。

【川との関わり合い】

聞き手：越前市は日野川中流に位置していますが川との関わりはどうでしょうか？

市長：（1）日野川について

越前市最大の河川は日野川です。

日野川は福井、岐阜、滋賀の3県に接する三国岳を水源とし、越前市を南北に貫いて流れ、九頭竜川に合流する長さ71.5kmの一級河川です。

古代から日野川は、下流の福井や三国、上流の南条や今庄との物流の動脈として、住民生活と深くかかわってきました。

天平20年（748年）頃に越前国の掾（じょう）〔国司の三等官〕に任命された大伴池主（おおとものいけぬし）は、万葉集の編者である大伴家持（おおとものやかもち）と親交があり、多くの歌のやり取りをしましたが、その中に日野川を「叔羅川（しくらがわ）」という名で詠んだ歌が残されています。

時代は下って現在も、日野川は越前市民にとって大切な憩いの場となっています。

日野川河川緑地は、中心市街地の公園緑地が不足している状況を踏まえ、日野川に隣接した芦山公園（35.2haの総合公園）を背景として利用し、村国山の緑と日野川のせせらぎを一体的に整備することを目的に、「水と緑に親しむ市民のふれあいゾーン」として整備を進め、平成7年度に区域を拡大し、現在は4.54haの公園緑地として供用されています。

また、日野川河川緑地は中心市街地の東側に隣接しており、スケートボード、ウォーキング、グラウンドゴルフ、ゲートボールなどのレクリエーション活動に多くの市民が利用し、11月3日の「菊花マラソン」のコースになるとともに、丹南サイクリングロードの一部にも取り入れられるなど、市民の健康づくりに欠かすことのできない場所となっています。



菊花マラソン

毎年8月15日には日野川河川緑地で、「越前市サマーフェスティバル」のフィナーレを飾り、1万発の打ち上げ花火が夜空を彩る「花火大会」が開かれるとともに、「そうだ！川に行こう！」「おしゃれなリ・BAR」等のイベントも行われ、日野川の豊かな自然環境を生かした賑わいも生まれています。



花火大会

本年度からは、日野川の左岸にバーベキュー場を設けるなど、中心市街地の活性化に寄与する公園緑地として、今後も整備を進めていく計画です。

また、日野川はアユの釣り場としても有名で、他県からも含めて多くの太公望たちが賑わっています。

さらに、日野川は米どころ越前市の農業用水の供給源としても非常に重要な役割を担っています。

昔から日野川は、洪水と干ばつを繰り返したことから、日野川を主水源とする農業を営む上で、流域住民は大変な苦勞を重ねてきました。

そこで、国、県、流域市町が協力して日野川水系の総合開発を進め、平成17年に日野川上流域に榊谷ダムが完成し、現在は日野川流域の穀倉地帯に安定的に農業用水が供給されるようになっています。

（2）越前和紙について

越前市は古くからものづくりが盛んな地で、その代表的なものとして、1500年の歴史を誇る越前和紙、千代鶴国安を祖とする越前打刃物、江戸時代初期より受け継がれてきた越前箆の3つが、国の伝統的工芸品に指定されています。

一つの自治体で3つの伝統的工芸品があることは、全国的にも珍しく、「ものづくり都市 越前」の象徴と言えます。

その中でも越前和紙は、清らかな川の水があったからこそ生まれた伝統産業です。

越前和紙は、市東部（旧今立町）の「五箇」と呼ばれる地域で生産されていますが、ここには「紙祖神」の言い伝えがあります。

五箇の一つの大滝町を流れる、岡本川の上流に美しい女性が現れ、紙漉きの技を教えたそうです。



川上御前

これが和紙作りの起源で、住民は女性を「川上御前」と呼んで岡太（おかもと）神社に祀りました。



紙漉き（奉書）

越前和紙の歴史は、水の歴史とも言えるわけです。

正倉院には天平2年（730年）の越前和紙が保管されており、古くから全国有数の紙産地であったことが知られています。

最初は写経用紙を漉いていたようですが、その後、公家や武士階級が紙を大量に使い出すと紙漉きの技術、生産量も向上し、「越前奉書」など最高品質を誇る紙の産地として、幕府や領主の保護を受けて発展しました。

日本最古の藩札「福井藩札」や明治新政府の「太政官金札用紙」が漉かれたのも、越前市の五箇でした。

その後、印刷局紙幣寮が設置され、日本の紙幣と越前和紙は密接な関係となりました。

このような長い歴史と伝統の中に育まれた五箇では、品質、種類、量ともに日本一の和紙産地として、生産が続けられています。

越前市では、平成26年度に「越前市工芸の里構想」を策定しましたが、本構想は伝統産業の継承と振興、産地間連携の推進、交流人口の拡大を通して、地域の活性化

を目指すものです。

構想実現への第一歩として、和紙文化の発信拠点、産業観光の拠点とするため、平成27年度から「紙の文化博物館」の改修事業に着手しており、来年度にリニューアルオープンする予定です。

【川と関連した事業】

聞き手：川と関連した事業についてはどうですか？

市長：（1）コウノトリを呼び戻す取組み



市内で巣作りするコウノトリ

越前市はコウノトリに縁（ゆかり）が深く、絶滅が危惧された昭和30年代以降に数回にわたってコウノトリが飛来し、生息しています。

近年では、平成22年に飛来したコウノトリが本市に107日間滞在し、「えっちゃん」と名付けられました。

その後、本年まで7年連続してコウノトリが飛来を続け、本年3月25日に飛来したオスのコウノトリ「みほとくん」と、4月30日に飛来したメスのコウノトリ「ゆきちゃん」は、「えっちゃん」の滞在日数を超え、現在も本市に滞在を続けています。

来年春には自然繁殖として、福井県内で51年振りとなる産卵に大きな期待が寄せられています。

また、平成23年12月からは福井県が兵庫県よりコウノトリのペア「ふっくん」と「さっちゃん」を借り受け、本市の白山地区で飼育を行っており、本年4月に4年連続で産卵をしましたが、今回も残念ながら5個の卵が全て無精卵であったため、兵庫県より有精卵の提供をいただいて托卵が行われ、5月30日に2羽のヒナが誕生しました。

この2羽のコウノトリは、9月25日に本市の坂口地区で放鳥されました。

一昨年6月にも「ふっくん」と「さっちゃん」のペアの托卵で3羽のコウノトリが誕生しており、福井県では実に50年振りのヒナの誕生でした。

そのうち「げんきくん」と「ゆめちゃん」の2羽は、昨年10月に白山地区で放鳥されました。

コウノトリの放鳥は福井県では初めて、全国では3番目でした。



コウノトリの放鳥

放鳥されたコウノトリがふるさと越前市に定着するよう、今後も住民と力を合わせて環境整備に努めてまいります。

こうした取組みが着実に成果を上げてきた背景には、豊かな里地里山が残されている越前市の西部地域（白山地区・坂口地区）が、平成16年度に環境省の「里地里山保全再生モデル地域」に指定されるとともに、平成21年度から同地域で無農薬無化学肥料の「コウノトリ呼び戻す農法米」の米作りが始まったことなどが挙げられます。

こうした気運の高まりを受けて、本市はコウノトリを生物多様性や自然再生のシンボルと位置付け、「生きものと共生する越前市」を目指して、平成23年3月に「コウノトリが舞う里づくり構想」を策定し、「里地里山の保全再生」「環境調和型農業と農産物のブランド化」「学びあいと交流」の3つの方針に基づく取組みを推進しています。

コウノトリが越前市に定着するための具体的な取組みとしては、市内中心部を流れる日野川は中流域では流れが早く、餌となる魚種も下流域ほど多くありません。

また、コウノトリの定着を目指した環境整備に中心的に取り組んでいる市西部地域は、河川の源流域であり、大きな河川が存在しません。

そこで、西部地域へのコウノトリ定着のため、白山地区のコウノトリ飼育ケージの周辺に、秋期から冬期にかけて河川に代わる採餌環境を創出することが必要と考えており、水田内の一部に渇水時や積雪時にも水生動物が生息できる水田退避溝や休耕田ビオトープを整備してきました。

その結果、本年3月から4月にかけて、市西部地域に飛来し滞在しているコウノトリ2羽の行動観察において、頻繁に水田退避溝や休耕田ビオトープでの採餌が観察されており、コウノトリの餌場環境の創出に高い効果が得られたと感じています。

また、これまでの生物調査の結果から、水田退避溝や休耕田ビオトープ等は水田と比較し、非常に多くの水生生物が生息できる環境であることが明らかとなっており、里地里山における生態系保全に高い効果が得られることも示されました。

今後もコウノトリの野外定着を目指して、水田退避溝や休耕田ビオトープの取組み面積をさらに拡大してまいります。

(2) 日野川河川敷を使った事業



日野川河川緑地公園

越前市のシンボルである日野川河川敷を使った事業として、日野川河川緑地公園で行われている2つのイベントを紹介します。

1つ目は、「そうだ！川に行こう！」です。

このイベントは、子どもによるアユの手づかみ体験、Eボート（パドルで漕ぐボート）体験、マイテントの持参によるキャンプ等と多彩な催しを行い、日野川の魅力を肌で感じ、川への関心を高めてもらうイベントです。

平成21年度から始まったイベントで、本年で8回目となり、毎年、夏休み期間中の7月下旬に開催し、2,000人余りの参加者で賑わっています。

このイベントの主催は「日野川に砂礫河原をとりもどす会」で、福井県日野川漁業協同組合や福井工業高等専門学校、武生商工会議所、国土交通省福井河川国道事務所等で構成される「そうだ！川に行こう！」実行委員会が協働して参加しています。

これらの団体の協力を得て、日野川のお魚観察（日野川水族館）やアユの塩焼き販売等を行うとともに、国土交通省福井河川国道事務所には、自然再生事業のPRと合わせて砂礫河原の石や伐採木を再利用したストーン&コースターペイントの出展を行っていただいています。

2つ目のイベントは、「おしゃれなリ・BAR」です。

このイベントは、日野川の河川空間を生かした賑わいの創出と魅力ある川まちづくりを目指して、平成23年7月に「そうだ！川に行こう！」の前日イベントとしてスタートし、平成26年度からは8月最終週末に開催時期をずらして単独開催することになり、本年で6回目の開催となりました。

地元のアーティストや吹奏楽との連携など様々なジャンルの水辺コンサートや、地元飲食店・バーと連携した水辺空間のおしゃれなオープンカフェなどのイベントを行うとともに、日中は川の専門ガイドによる、子どもが楽しめる川遊び体験を実施しています。



そうだ！川に行こう！



福井豪雨（大滝町）



おしゃれな リ・BAR

このイベントの主催は「おしゃれな リ・BAR実行委員会」で、環境文化研究所や日野川流域交流会、あそぼっさ越前市ハッピープロジェクトチーム等の団体や市民により構成されており、開催期間もこれまでの3日間を本年は5日間に拡大し、連日大勢の市民で賑わいました。

「そうだ！川に行こう！」「おしゃれな リ・BAR」ともに、国が進めるミズベリング・プロジェクトの一環として広く全国にもPRされており、日野川流域の賑わい創出と中心市街地の活性化に寄与しているイベントです。

【河川に関連して特に力を入れていること】

聞き手：河川に関連して特に力を入れていることは何ですか？

市長：（1）福井豪雨

越前市は、平成16年7月18日未明からの「福井豪雨」により、死者1人、家屋の全壊2件、半壊5件、床上浸水271件など、被害額が推計で4億5千万円に上る甚大な被害を受けたことから、この豪雨の検証を通して地域防災力の強化に努めてきました。

（2）越前市東部集中豪雨

平成24年7月20日に発生した「越前市東部集中豪雨」においては、市東部地域が1時間に96ミリもの記録的かつ局地的な豪雨に見舞われ、市内の味真野地区、粟田部地区、岡本地区の3,587世帯、約1万2千人に避難準備情報を発令しました。

この豪雨により、家屋や事業所等の一部破損、床上浸水、床下浸水などの被害が発生し、自然の猛威、災害の恐ろしさを改めて認識しましたが、幸いにして人的被害がなかったことは、市や住民による日常的な備えと防災訓練の成果であったと考えています。



越前市東部集中豪雨（粟田部町）

【河川行政に対する要望】

聞き手：最近の河川（行政）について何か感じられていることや、ご意見があれば忌憚なくお話し頂きたいのですが。

市長：日野川の支川で、中小河川である吉野瀬川は、水源を越前市南西部の矢良巢岳（やらすだけ）に発し、越前市の西部市街地を北流し日野川に合流する18.0kmの一級河川です。

吉野瀬川は全川にわたり河積が狭く、降雨時における水位の上昇が著しいため、平成16年、平成18年に続き、平成25年には流域住民1万3千人に対して2回の避難勧

告と1回の避難準備情報を発令し、流域住民の間には洪水に対する危機感が高まっています。

上流に吉野瀬川ダムの建設が計画され、水没する集落の住民の方には思い出深い故郷を離れるという、大変つらい集団移転を決断していただきました。

集団移転から既に13年が経過し、移転された方は新しい土地で平穏な生活を送っておられますが、未だ吉野瀬川ダムの建設スケジュールが明らかとなっていないことに憤慨されています。

集団移転された方をはじめ吉野瀬川流域の住民は、安心した生活を送るために一日も早いダム本体の着工を熱望されているわけです。

本市としても、福井県と連携して吉野瀬川ダム建設事業の促進に取り組んでいるところであり、今後も市民の生命と財産を守り、安全で安心な生活を確保するため、治水対策の強化を図っていきたくと考えていますので、国土交通省のご支援をお願い申し上げます。

【次の市町村長のご紹介】

聞き手：それでは、次のリレーインタビューをお願いする市町村長さんをご紹介いただきたいと思います。

市長：京都府宇治市の山本正市長をご紹介します。

宇治市は、ご存知の通り「源氏物語」最後の十帖、世に言う「宇治十帖」の舞台となったところです。



紫式部公園の紫式部像

その「源氏物語」を執筆した紫式部は、生涯でただ一度だけ都を離れて暮らした時期があり、その地が「越前国府」の置かれた越前市であったという歴史的経緯があります。

そこで、越前市内には日本で唯一の寝殿造（しんでんづくり）庭園を持つ「紫式部公園」が昭和61年に整備されたほか、「源氏物語」と紫式部をさまざまな角度から

探究する「源氏物語アカデミー」を昭和63年から毎年開催するなど、源氏物語や紫式部に因んだまちづくりを進めており、こうしたご縁で宇治市との交流を行っています。

平成23年11月に両市は、「都市連携協定書」と「災害時相互応援に関する覚書」を取り交わしました。

平成24年に宇治市が、宇治川支流で大規模な水害に見舞われた際には、越前市も支援をさせていただくとともに、両市は毎年6月に東京で開催される「水害サミット」に参加し、防災態勢のさらなる強化に努めています。

山本市長からは、情緒溢れる宇治川や平等院鳳凰堂、「宇治市源氏物語ミュージアム」など、ロマンに満ちたお話が伺えるものと思います。

聞き手：本日は長い時間ありがとうございました。